1 ピエール・ベルフォン社編集の《生活を変える》双書は、一九二七年にフランスで刊行された『ウクライナにおけるロシア革命』という題名での、マフノーの回想録の第一巻のみならず、のちにロシア語で印刷された、未訳の第二巻、第三巻のフランス語訳を刊行する。ここにあげた抜萃は、ベルフォン社の無償の許可による、第二巻からの引用である。

2 Nicolas Boukharine (1888—1938) 一九〇六年にボリシェヴィキ、一九一七年から死ぬまで党中央委員会のメンバー、一九二八年以来《右派》の指導者、輝かしい経済学者で理論家、スターリンに処刑される。

3 中央ラーダは、一九一七年十一月以来、新しいウクライナ民主共和国の一種の議会であった。一九一八年の初めにボリシェヴィキとドイツ帝国政府との間で締結されたブレスト＝リトフスク条約は、オーストリア人とドイツ人にウクライナの門戸を開放していた。彼らはそこに、スコロパドスキーという《コサック首長》(かつてウクライナのコサック人たちが選んだ首長が帯びていた称号)によって主宰される、反動政府を作った。しかし、一九一八年末の中央帝国の敗北は、ドイツとオーストリア軍にウクライナから撤退することを余儀なくさせ、スコロパドスキーは逃亡した。彼のあとは、ラーダの元メンバー、ブルジョア分離主義者、ペトリウーラを指導者とする《執政官政府》が継いだ。

4 ユンカー、田舎紳士を意味するドイツ語で、エルベ河の東の大地主の家族から募られる、貴族的な構成の、ドイツ将校団。

5 社会革命党の左翼のみが、当時、ボリシェヴィキと協力していた。

6 一九一八年四月十二日の夜、もっともらしい口実の下に、ボリシェヴィキ権力は、マライア・ドミトロフカの特殊なホテル、モスクワのアナキスト諸グループ連盟の本拠を、警察・軍事力をもって攻撃し荒らさせた。

7 十八世紀における、ツァーとポーランド王の軍隊に対するウクライナ民衆の蜂起の英雄たちの名を持つ、ウクライナの反動政府の軍隊。

8 ドゥイベンコについては、次の注を見よ。——マフノーは、ボリシェヴィキにとってまったく未知のものであったわけではない。というのも、すでに見たように、一九一八年六月、レーニンは彼を迎えているからである。

9 Paul Dybenko (1889—1938) 農民の子、水夫、一九〇六年にボリシェヴィキ、ロシア革命の際のクロンシュタットの人気弁士の一人。ウクライナで初期の赤軍部隊を指揮する。一九三八年におそらく処刑された。

10 ペトログラード(現在レニングラード)にある当時最大の精錬所。

11 マフノー派反乱軍の文化教育部門によって書かれた。

12 イタリア語で、パルチザンの首領を意味する。

13 『自由への道』(マフノー派機関紙)からの抜萃。



# クロンシュタット 1921

クロンシュタットの反乱は、アナキズムのアンソロジーの中にかかげられるのに——大きくかかげられるのに——値する。自然発生的であるにもかかわらず、それは、特に絶対自由主義的なものではなかった。実をいえば、アナキストたちは、そこで大きな役割を果たしはしなかった。『クロンシュタットの反乱』(一九三八年十一月、一九四八年刊行)についての書物を書いている、イダ・メッツは、アナキストの影響は、そこでは「アナキズムが、その見地から、労働者民主制の考えを普及させたその範囲でしか」見られなかった、と認めているのである。しかしながら、クロンシュタット革命委員会は、その中での地位につくように、二人のアナキストを招いている。その後、『クロンシュタット』を書いたE・ヤルチュークと、『知られざる革命』の中で、「勤労階級自身によって直接になされた……社会革命のまったく自立的な大衆的な最初の試み」クロンシュタットに、多大のページをさいている、ヴォーリンである。しかし、ヤルチュックも、ヴォーリンも、その時、彼らがボリシェヴィキの牢獄の中にいたために、クロンシュタット革命委員会の招待に応えることができなかった。

読者は、反乱者たち、水兵たちと労働者たちの呪詛を、冷厳な事実の中にありのままにご覧になることとなろう。われわれの目的は、確かに、彼らとともに、レーニンとトロツキーを嘲弄することでも、われわれの責任でまたその両者への悪罵と皮肉をいうことでもない。怒りが、反乱を、その表現の中で過度なものとし、部分的には不当なものとしたことは、あまりにも明らかである。その到達点がクロンシュタットとなった、一九一八年から一九二一年の間にボリシェヴィキ権力によって積み重ねられた誤ちは、十月革命の首謀者たちの、革命的な信条や天分を、何一つ否定するものではない。しかし、一九一七年の大衆蜂起の、下部における張本人たちであったのち、赤軍の将校生徒たちと蒙古兵たちの弾丸の下に死んでいった、あの水兵たち、あの労働者たち、彼らが、歴史家の客観性をわがものとすることができ、自分らの死刑執行人への讃歌を歌うことができるであろうか?

クロンシュタットの反乱の弾圧は、反乱の日刊紙『イズヴェ

スチャ』を通読して示唆される印象とは反対に、レーニンとトロツキーの邪悪や呪われた意思の結果ではなかった。そうではなく、内乱、経済の崩壊、饑饉という、客観的な打ちかちがたい不慮の出来事と、権力をもたらした大衆的な勢力から次第に孤立していった独裁制度の苛酷さという、言語道断な主観的な誤ちとの、宿命的なからみ合いの結果であった。

そう理解してみると、クロンシュタットの教訓は、それを聞き入れようとしない、プロレタリアートの名において、悲劇的にも逆説的にも、結局は自分らの武器をプロレタリアートに対して向ける、上からの革命家すべてへの、反省をうながす叱声、戒告であると思われる。

## トロツキーとの出会い（1917/3）

エマ・ゴールドマンによる[1]

……しばらく前から、私は……レオン・トロツキーがニューヨークにいることを知っていた……。私はまだ一度もトロツキーに会ったことがなかった。しかし、彼がロシア[2]に出発するに先立ってそこで話すこととなる、送別集会のことを知らされた時、私はちょうど市内にいたのであった。私はその集会に出席した。むしろ退屈な何人かの演説者のあとで、トロツキーが紹介された。中背の、頬のこけた、赤毛で、髭がまばらの彼は、快活に進み出た。まずロシア語で、それからドイツ語で述べられた彼の演説は、力強く、強く感動させるものであった。私は、彼の政治的立場に同意していなかった。彼は、メンシェヴィキ（社会民主主義者）で、われわれからはきわめて遠かった。しかし、戦争の諸原因についての彼の分析は輝かしいものであったし、ロシア臨時政府の無力についての彼の告発は圧倒的で、革命を展開させている諸条件の彼の提示は鮮やかであった。彼は、二時間にわたる演説を、故国の勤労大衆へ雄弁な讃辞を与えながら終えた。聴衆の熱狂は頂点に達した。サーシャ〔アレクサンドル・ベルクマン〕と私、われわれも、演説者に敬意を表する熱烈な喝采に、喜んで加わった。われわれは、彼のロシアの将来への深い信頼を、心から共にしていた。

集会のあとで、われわれはお別れをいうためにトロツキーに会った。彼は、われわれの噂を聞いていた。そして彼は、再建を援けるために、われわれがいつロシアにゆこうとしているのかをたずねた。「われわれはきっと、あちらで近く会うことになろう」と彼はいった。

私は、われわれの同志、われわれの師であり友である、ピョートル・クロポトキンよりも、一メンシェヴィキ、トロツキーをずっと身近なものにわれわれに感じさせた出来事の、この思いがけない展開について、サーシャと議論をした。戦争は、奇妙な仲間関係を生みだした。そしてわれわれは、われわれがロシアにいった時も、やはり同様にわれわれはトロツキーを身近に感ずるであろうか、と自問した……。



## クロンシュタットの思い出

エマ・ゴールドマンによる[3]

ロシア生まれのアメリカの偉大なアナキスト、エマ・ゴールドマンが何者であるのか、われわれはすでに見た（I巻三二四ページ注）。一九一九年にアメリカ合衆国からロシアに追放された彼女は、ボリシェヴィキたちがクロンシュタットの反乱を鎮圧することを決定したその時、ペトログラードにいた。彼女は、この悲劇的なエピソードを、フランス語ではまだ刊行されていない彼女の回想録『わが生を生きて』の中で詳述している。

……かつて私がロシアにいた当時には、ストライキの問題が、しばしば私の気持を引いた。人々は、その種のちょっとした企ても粉砕され、参加者は投獄される、と私に語った。私はそんな場合にはいつもそうのように、すぐには信じなかった。私は、情報を得るために、ゾーリン[4]に会いにいった。彼は驚いて叫んだ。「プロレタリアート独裁の下でのストライキ！　そんなものはありえない」。彼は、そんな突飛な不可能な話を信用したといって、私を非難すらした。要するに、ソヴェト・ロシアの労働者が誰に対してストライキに入るのか。彼ら自身に対して？　彼らは、政治的にも産業的にも、国の主人である。確かに、労働者たちの中には、十分な階級意識を持っていない、自分たちの真の利益を認識していないものも、まだ何人かいる。彼らは、時々、ぶつぶつ不平をいう。しかし、それは……革命の敵とエゴイストによってそそのかされた連中である。何かにつけ無知な人々を誤ちに誘い込む、でくの棒たち、厄介者たち……。明らかにソヴェト権力は、この種のサボをするものたちから、国を守らなくてはならない。もっとも、彼らの大半は、牢獄にいる。

以来、私は、個人的観察によって、経験によって、ソヴェト・ロシアの牢獄にいる、反革命的な真の《サボをする人》と無頼漢は、取るに足らない少数者であることを知った。刑罰を受けている民衆の大多数は、共産主義教会に対する根本的な罪のためにとがめられている、社会的異端者からなっていた。なぜなら、いかなる罪も、党のものとは別の政治的見解を持ち、ボリシェヴィズムの悪意と罪悪に抗議する罪以上の、憎悪をもって眺められることとはないからである。私は、大多数は、よりよい待遇と生活条件を要求して罪となった、農民であり労働者である、政治囚であることに気づいた。公衆に厳秘に付されていたこの事実は、しかしながら、うわべでは秘密にされているソヴェトのほとんどすべてのことと同様に、皆に知られていたのである。この禁止されていた情報、それは、一切の障害を排して、どうして漏れていたのであろうか。それは、私にとっては神秘であった。しかし、実際には、それは漏れていたし、山火事のような

速さと激しさでひろまっていた。

ペトログラードに帰って二十四時間しないうちに、われわれは、市が不平とストライキの噂でわき立っているのを知った。その理由は、異例な厳しい冬とソヴェトのいつもながらの近視にもとづく、増大する苦しみであった。恐るべき吹雪が、市のための食糧と燃料のか細い貯蔵の輸送を遅らせていた。その上、ペトログラード・ソヴェトは、多くの工場を閉鎖し、その従業員たちの食糧割当を半分だけ減らすという、まぬけな誤ちを犯した。同時に、人々は、非党員の労働者たちが着るものにも履くものにも貧窮しているというのに、商店では、党員たちに、短靴と衣服の新しい入荷品を配ったことを知った。そして、その上に誤ちを重ねて、当局は、この状況を改善する手段について討議するための、労働者によって招集される集会を禁止した。

ペトログラードの共産主義的ではない人々の間では、状況はきわめて重大だ、と一般に考えられていた。空気は緊迫し、爆発しそうであった。われわれは、当然ながら、市にとどまることに決めた。不吉な混乱を避けうるという希望があってではなく、われわれは、人々のために役立ちうるよう、現場にいることを望んだのである。

嵐は、予期していたより早く始まった。それは、トルーベスコイの製粉場の労働者たちのストライキによって始められた。彼らの要求は、まことに穏当なものであった。すなわち、久しい以前から彼らに約束されていたような、食糧配給割当の増加、処分しうる靴の配布、である。ペトログラード・ソヴェトは、彼らが仕事に戻らないかぎり、スト参加者たちと討議することを拒否した。

軍役中の若い共産主義者たちからなる、武装した《クルサンティ》の一隊が、製粉場の周りに集まっていた労働者たちを解散させるために派遣された。将校生徒たちは、空中に発砲しつつ大衆を挑発しようとした。しかし、幸いにも、労働者たちは武装せずに来ていた。血は、流されなかった。スト参加者たちは、もっとずっと強力な武器、労働者仲間の連帯に訴えた。その結果、五つの工場が道具を捨てて、ストライキの運動に合流した。彼らは、ただ一人の男のように、ガレルナーヤのドックから、海軍省の経理部から、ペトロニーの製粉場から、バルチスキーとラフェルムの工場から、やってきた。彼らの街頭デモは、直ちに兵士たちによって粉砕された。手にしたあらゆる情報から、私は、スト参加者に対してとられた扱いは、いささかも友愛的なものではない、と結論した。

リーザ・ゾーリンのような熱烈な共産主義者でさえ、それにびっくりし、用いられた手段に抗議した。リーザと私、われわれは、お互いに長いあいだ遠ざかっていた。それなので私は、彼女が私に対してその胸中を打ち明ける必要を感じたことに驚いた。彼女は、赤軍の人間が、労働者たちをあんなふうに手荒らに扱うとは、決して信じられなかったのである。彼女は、抗議した。たく



さんの女たちが気を失った。ほかの女たちは、その光景を見て、ヒステリーの叫びをあげた。リーザの脇にいた一人の女が、彼女を党の活動的なメンバーと認め、彼女がこの残忍な場面の責任者であると考えた。その女性は、激怒してリーザの方へ振り向くと、彼女の顔一面になぐりかかり、夥しい血を流させた。

親しい老いたリーザよ！　私の感傷的な性格のために、いつも私が心配させていた彼女！　なぐられてよろめきながら、彼女は、攻撃者に、「こんなことは大したことじゃないわ」といい放った。そして「悲歎に暮れているその女性を安心させるために、私、自宅まで送らせてくれるように彼女に頼んだの」と、リーザは私に物語った。「彼女の家？　それは、わが国にまだそうしたものが存在しうるとは私には想像もできないような、臭い穴倉だった。あの女性と、その夫と、彼らの六人の子供に占められた、薄暗い、寒い、むきだしの一つの部屋。そして、私は、私がその間いつもアストリア・ホテルで暮らしてきたことを考えたわ！」と、彼女は溜息をついた。彼女は、そうした恐ろしい事件がまだソヴェト・ロシアでは圧倒的であるとしても、それは彼女の党の誤ちではないことはよくわかっていると私に語りながら、私の理解を熱心に求めた。ストライキの原因となったものも、共産主義者たちの片意地ではなかった。労働者の共和国に対する、帝国主義世界の包囲と陰謀が、わが国の貧しさと苦しみの責任を負うものと考えなくてはならない。しかし、何がどうであれ、彼女はもはや、彼女の快適なアパートにとどまっていることはできなかった。絶望した女性の一室とその寒さにこごえた子供たちのイメージが、彼女の夜々に付きまといはじめた。哀れなリーザ！　彼女は、律気で、献身的で、懸命になる性格であった。しかし、政治的にはまことに盲目的であった！

より以上のパンと燃料のための労働者たちの要求は、当局の勝手な冷酷な態度のおかげで、間もなく正確に政治的な要求に変わった。誰によってなのか決してわからない壁に貼られたある声明は、「政府の政策の全面的な変更を」訴えていた。それはいっていた。「労働者と農民は、第一に自由を必要としている！　彼らはボリシェヴィキたちの命令によって生きることを望まない。彼らは、彼ら自身の運命を管理することを望む」。毎日、状況はいっそう緊迫し、新しい要求が流布され、壁や建物の中に貼られた。最後に、権力の座にある党が、あれほど嫌悪し非難していた憲法制定会議のためのアッピールが現われた。

戒厳令が宣言され、労働者に工場に戻るよう命令がだされた。さもないと、彼らは食糧の配給割当を奪われることとなった。しかしながら、その命令は効果がなかった。そこで、いくつかの組合が清算され、その指導者たちと最も強硬なスト参加者たちは、投獄された。

無力なわれわれは、武装した兵士やチェカーによって取り囲まれた人々の群れが、窓の下を通り過ぎてゆくのを

見守っていた。ソヴェトの指導者たちに彼らの戦術は気違い沙汰で危険だと説得したいという希望を抱いて、サーシャは、ジノヴィエフに会おうとした。一方私は、ペトログラードの労働組合ソヴェトの指導者、ラヴィチ、ゾーリン、ジベルロヴィッチに会見しようとしていた。しかし、誰もが、メンシェヴィキと革命的社会主義者によって企てられた反革命の陰謀から市を守るのに忙しすぎるという口実の下に、われわれに会うことを拒否した。この決まり文句は、三年来やたらとくり返されてすでに陳腐であったが、共産主義活動家の眼をくらますには、まだいつでも好都合なのであった。

ストライキは、あらゆる非難措置にもかかわらず拡大した。逮捕が相次いだ。しかし、当局の反応の仕方に見られた愚鈍さが、無知な分子を勇気づけた。反革命的なユダヤ人排斥の声明が現われ始めた。市には、スト参加者に対する軍事的弾圧やチェカーの残忍さについての、気違いじみた噂が広がっていた。

労働者たちは決然としていた。しかし、間もなく、彼らが飢えることが明らかになった。人々が彼らに与える何がしかのものを持っていたにしても、スト参加者たちを助ける手段はなかった。工業地帯に近づくことのできるすべての道路は、軍隊によって遮断されていた。その上、住民自身が恐ろしい状況の中にあった。われわれが食糧として衣服として集めうるわずかなものは、大海への一滴の水であった。われわれは、独裁と労働者たちとの、それぞれの手段の格差をよく理解していた。その格差は、よりずっと長期にわたって抵抗することを可能とするには、あまりにも大きなものであった。

この緊迫した、絶望的な状況の中で、和解のためのいくらかの希望を与える新しい要素が、にわかに出現した。それは、クロンシュタットの水兵たちであった。一九〇五年の革命の間に、またのちに一九一七年の三月と十月の蜂起の中で、あれほど誠実に示された、自分たちの革命的伝統と労働者の連帯に忠実な彼らは、ペトログラードのへとへとに疲れたプロレタリアたちのために改めて弁護をした。それは、無分別ではなかった。悠々と、誰もそれが何事なのか知らなかったので、彼らは、スト参加者たちの要求を問い合わせるための委員会を派遣した。この委員会の報告が、戦艦ペトロパヴロフスク号とセバストーポリ号の水兵たちに、ストライキ中の兄弟・労働者たちのための決議を、採用するように導いた。彼らは、自分たちが革命とソヴェトに忠実であり、共産党に対してもまた誠実である、と宣言した。彼らは、それにもかかわらず、いく人かの人民委員の勝手な態度に抗議し、労働者を組織した集団にとってのより大きな自決の必要を、強く力説した。彼らはさらに、組合と農民組織のための集会の自由と、それとともに、ソヴェトの牢獄と収容所にいる、政治活動と組合活動による拘禁者すべての釈放とを、要求した。

これらの海兵旅団の事例は、クロンシュタットに停泊していた、バルチック艦隊の第一、第二艦隊によっても引きつがれた。一万六千人のクロンシュタットの水兵、赤軍兵士、労働者が出席した、五月一日の街頭集会の際、似たような決議が、三票を除いて満場一致で可決された。その三人の反対者は、集会の議長をした、クロンシュタット・ソヴェト議長ワシリエフ、バルチック艦隊人民委員クズミン、連合ソヴェト社会主義共和国議長カリーニン、であった。



二人のアナキストがこの集会に出席し、そこを支配していた、秩序、熱狂、善意をわれわれに物語りに戻ってきた。十月の最初の日々以来、彼らは、連帯と熱烈な友愛の、これほど自発的な表示を見たことがなかった。彼らはただ、われわれがその場に立会わなかったことを歎いた。一九一七年にカリフォルニアに政治犯として引き渡される危険に陥った時、クロンシュタットの水兵たちが勇ましく擁護したサーシャの出席と、水兵たちが評判を知っていた私自身の出席は、決議に重みを加えたであろう、と彼らはいった。われわれは、ソヴェト領内で、指令によって組織されたのではない、初めての大大衆集会に参加すること、それは驚くべき経験だ、ということで彼らと一致した。ゴーリキーはずいぶん昔に、バルチック艦隊の人間は、皆生来のアナキストだ、私の場所は彼らの間にある、と私に断言した。私は、乗組員たちと会うために、彼らと話すために、しばしばクロンシュタットにゆきたいと思った。しかし、当時の私の精神状態は混乱し弱っていたので、私は、何一つ建設的なものを彼らに送りえない、と思い込んでいた。今ならば私は、体制への敵意を私が水兵たちにそそのかしているという、ボリシェヴィキたちが流しているらしい噂をすべて承知の上で、水兵たちの間に私の場所を求めにゆけるであろう。サーシャは、共産主義者たちがいっていることは、彼にはどうでもいい、といった。彼は、水兵たちに、ペトログラードのスト参加労働者についての彼らの抗議に、荷担していた。

われわれの同志たちは、クロンシュタットの側からのスト参加者への共感の表示は、反ソヴェト的行為とは決して見なしうるものではない、という事実を強調した。実際、水兵たちの気持と、彼らの大衆集会で可決された決議は、はっきりと親ソヴェト的であった。彼らは、飢えたスト参加者たちに対する独裁的な態度に対して、精力的に抗議をした。しかし、集会は、いかなる瞬間にも、共産主義者たちへのいささかの敵対をも見せなかった。実際、この大集会は、反対に、クロンシュタット・ソヴェトの賛助をえて開かれたのである。水兵たちは、彼らの忠実さを示すために、カリーニンが町へ到着した際、歌を歌い音楽を奏でながら彼に会いにいった。彼の演説は、注意深く最大の敬意をもって聞かれた。彼と彼の同志たちが水兵たちをとがめその動議を非難したあとですら、水兵たちは、われわれの報告者が確認しえたように、カリーニンを最大の友情をもって駅まで見送った

のである。

われわれは、艦隊と守備隊と労働組合ソヴェトの三百人の代表の集会の際、クズミンとワシリエフが水兵たちに逮捕されたという噂を聞いていた。われわれは、二人の同志に、それについて何か知っているかたずねた。彼らは、その二人の人物が実際に逮捕されたことを確認した。その理由は、クズミンが、集会において、水兵たちとペトログラードのスト参加者たちを裏切者として非難し、……今後、共産党は反革命者として彼らと最後まで闘うであろう、と宣言したからである。代表たちはまた、クズミンが、クロンシュタットの食糧と軍需品の補給を空にし、そうして町を衰弱させる命令をだしたことを知った。そのため、クロンシュタットの水兵たちと守備隊は、二人を逮捕することを決定し、貯蔵品を町から奪われないよう警戒した。しかしそれはいささかも、叛逆の何らかの意志の徴候でも、クロンシュタットの人々が共産主義者たちの革命的な公正さを信ずることを止めることでもなかった。反対に、共産主義者の代表も、他の代表同様に話すことを許されていた。体制への信頼のもう一つの証拠は、ストライキの和解による調停解決のために、ペトログラード・ソヴェトと協議する目的の、三十人からなる委員会派遣によって示されている。

われわれは、ペトログラードでストライキ中の兄弟たちへの、クロンシュタットの水兵たちと兵士たちの素晴らしいこの連帯を、誇らしいものに感じた。そして、われわれは、その結果として、水兵たちの熟慮のおかげで、紛争が終わることを希望していた。

悲しいかな！　われわれの希望は、クロンシュタットの出来事のニュースを聞いて一時間後に、早くも裏切られた。レーニンとトロツキーが署名した命令が、ペトログラードを唖然とさせた。その命令は、クロンシュタットはソヴェト政府に反乱した、と述べ、水兵たちを、「革命的社会主義者の裏切者と協力して、プロレタリア共和国に対する反革命的陰謀を準備した、ツァーの元将軍たちの手先」として非難していた。

「ばかな！　これこそ全く狂気の沙汰だ！」と、その命令の写しを読んだ時、サーシャは叫んだ。「レーニンとトロツキーは、誰かによって、不十分にしか知らされていないに違いない。しかし、彼らが、水兵たちに反革命の罪がある、と考えることは許されない！　どうしてそうなのか。ペトロパヴロフスクとセバストーポリの乗組員たちは、十月の時もその後もずっと、ボリシェヴィキたちをこの上なく強固に支持してきたではないか！　トロツキー自身が、〝革命の誇りであり花である〟と彼らに敬意を表したではないか」

「直ちにモスクワにゆかなくてはならない」と、サーシャはいった。レーニンとトロツキーに会い、すべては恐ろしい誤解であり、革命そのものにとって致命的ともなりうる誤ちであることを、彼らに説明することは、是非とも必要であった。サーシャには、全世界のいく百万の



人々にとってプロレタリアートの使徒である人物たちの、革命的公正さへの彼の信頼を放棄することは、きわめて辛いことであった。私は、レーニンとトロツキーは、クロンシュタットについての詳細な報告を毎晩電話しているジノヴィエフによって、おそらくだまされているのだ、と考えることで、サーシャと一致した。ジノヴィエフは、彼の同志たちの間でさえ、個人的な勇気があるという評判は決してなかった。彼は、ペトログラードの労働者たちによって示された不満の最初の徴候以来、恐怖に襲われていた。地方守備隊がスト参加者たちへ共感を表明したのを知った時、彼は、完全に度を失い、自分の個人的な護衛のために、アストリア・ホテルに機関銃の備え付けを命じた。クロンシュタットの事件は、彼の心を恐怖で満たし、彼はありそうもない話をモスクワにいいふらしたのであった。サーシャと私、われわれはすべてを知っていた。しかも私は、レーニンとトロツキーが、レーニンの命令がそう非難しているように、クロンシュタットの人々に反革命の罪がある、あるいは、白軍の将軍たちと協力している罪がある、と本当に考えているとは、信ずることができなかった。

異例な戒厳令が、ペトログラード全地方に発せられ、特別な許可を持つ役人以外は誰も、もはや市を離れることを許されなかった。ボリシェヴィキの新聞は、クロンシュタットの人々に反革命の罪がある、あるいは、白軍の将軍たちと協力している罪がある、と本当に考えているとは、信ずることができなかった。

異例な戒厳令が、ペトログラード全地方に発せられ、特別な許可を持つ役人以外は誰も、もはや市を離れることを許されなかった。ボリシェヴィキの新聞は、クロンシュタットに対する中傷と非難のキャンペーンを始め、水兵たちと兵士たちは、《ツァーの将軍コズロフスキー》を支持している、と公言した。それで、クロンシュタットの人々は、法律の保護を奪われたもの、と宣言された。サーシャは、状況が、レーニンとトロツキーの単なる不十分な情報とは別の、もっとずっと深刻な原因にもとづいていることを、理解し始めた。トロツキーは、クロンシュタットの運命を決めることとなる、ペトログラード・ソヴェトの特別会議に出席するはずであった。われわれは、そこに出席することに決めた。

それは私には、ロシアでトロツキーの話を聞く、初めての機会であった。私は、ニューヨークで別れた折りの彼の言葉、ツァーリズムの打倒によって可能となる大事業を援けるために、間もなくロシアで会えるだろう、という彼によって表明された希望を、思いださせうるかもしれない、と考えていた。われわれは、友愛的な精神においてクロンシュタットの問題を解決するため、われわれにも援助させてくれるよう、革命が共産党に提起したテストの中で、われわれの時間、われわれの精力、われわれの命すらも自由にしてくれるよう、彼に頼もうとしていた。

不幸にもトロツキーの列車の到着が遅れた。彼は会議に現われなかった。この集会で話した人々は、理性や訴えには心を動かされなかった。気違いじみた狂信が彼らの言葉を活気づけていた。そして、盲目的な恐怖が彼らの心を支配していた。

演壇は、《クルサンティ》によって厳しく守られてい

た。着剣したチェカーの兵士たちが、演壇と聴衆の間にいた。議長のジノヴィエフは、ヒステリーの発作寸前と見えた。彼は何度も立ち上がり、話してはまたすぐ坐った。最後に話し始めた時、彼は、不意の襲撃を怖れているかのように、右へ左へと頭をめぐらせた。彼の声は、子供のようにいつもか細く、鋭い調子に高まり、極端に耳障りで、いささかも説得的ではなかった。

彼は、クロンシュタットの人々に悪影響を与える人物として、《コズロフスキー将軍》を非難した。しかしながら、大半の出席者は、この将校が、トロツキー自身によって、大砲の専門家としてクロンシュタットにおかれたことを、知っていたのである。コズロフスキーは、年をとり老いぼれていた。彼は、水兵たちに、あるいは守備隊に、いかなる影響力も持たなかった。そのことは、この機会に特に設けられた防衛委員会の議長ジノヴィエフが、クロンシュタットは革命に反対し、コズロフスキーとそのツァー派の補佐役たちの計画を実現させようとしている、と宣言することを妨げなかった。

カリーニンは、いつもの家父長的な態度を捨て去り、たった数日前にクロンシュタットで受けた敬意を忘れて、水兵たちを激しい言葉で攻撃した。「われわれの栄光ある革命にあえて反抗する反革命者たちに対しては、厳しすぎるといういかなる措置もありえない」と、彼はいった。第二級の演説者たちが、同じ調子でつづき、彼らの共産主義的狂信主義をかき立て、実際の事実への無知を示し、先日まで英雄として兄弟として喝采を送った人々への復讐の狂乱を訴えた。

じだんだを踏み、喚く民衆たちの騒ぎの上で、呼ばわるただ一つの声が聞こえた。前の方の席にいた人物の、緊迫した低い声であった。それは、兵器廠のスト中の従業員代表であった。彼は、あれほど勇気があり誠実なクロンシュタットの人々に向けて、演壇から発せられた間違った非難に対して、抗議せざるをえなくなった、といった。ジノヴィエフを見つめながら、彼を指でさしながら、その人物は、「あなたの冷酷な無関心と、あなたの党の無関心が、われわれをストに追い込み、われわれが革命の中で並んで闘った水兵の兄弟たちの共感を呼び覚ました。それ以外のいかなる犯罪でも、彼らはとがめられるべきではない。あなたはそれを知っている！ あなたは、故意に彼らを中傷し、彼らの皆殺しを呼びかけている」と、痛烈に非難した。「反革命者め、裏切者！ メンシェヴィキ！ ならずもの！」といった叫びが、集会を真の気違い病院化した。

老いた労働者は立ったままでいた。彼の声が喧騒の最中で異議を放った。「レーニン、トロツキー、ジノヴィエフ、あなた方皆が、裏切者として、ドイツのスパイとして告発されたのは、わずか三年前のことだ」と彼は叫んだ。「われわれ労働者と水兵が、あなた方を助けにいった。あなた方をケレンスキー政府から救いだした。あなた方を権力の座につけたのは、われわれだ！ あなた



方はそれを忘れたのか。今では、あなた方はわれわれを剣でおどしている。あなた方が火遊びをしていることを思いだしてほしい！ あなた方は、ケレンスキー政府の誤ちと犯罪をくり返していっている。似たような運命があなた方にも訪れることに、注意せよ！」

ジノヴィエフは、この挑戦にびくついていた。壇上で、ひどく当惑したほかの人々が、椅子の中でもじもじしていた。共産主義者の参列者は、このいまわしい警告によって、しばらくの間おびえているように見えた。

この時、別の声が異議を唱えた。水兵の制服を着た大きい屈強な男が、会場の奥で立ち上がった。彼は、海の兄弟たちの革命的精神は、何一つ変わっていない、彼らは、最後の一人まで、彼らの血の一滴一滴をもって、革命を守る覚悟でいるのだ、といった。そして彼は、三月一日の大衆集会で可決されたクロンシュタットの決議を読み始めた。この豪胆さを前にして喧騒が起き、彼のごく近くにいる人々を除いては、それを聞きとれなくなった。しかし、彼は頑強に抵抗し、最後まで読みつづけた。

革命のこれら二人の大胆な息子が受けた唯一の返答は、皆殺しにするというおどしの下に、クロンシュタットの完全な即時の降伏を要求する、ジノヴィエフの決議案であった。それは、急いで投票され、どうしようもない混乱の中で、反対の声は圧殺された。

しかし、不吉な虐殺を前にした沈黙は、堪えがたいものであった。私は、私の気持を理解してもらわねばならなかった。他の発言に対してしたように、私の発言を圧殺する、執念につきまとわれた人々がいないように、と思う。私は、この夜の私の立場を、ソヴェト防衛の最高権力にあてた報告によって、知らせることとなろう。

われわれ二人だけの時、私はそのことについてサーシャに話した。私は、私の老友が同じ考えを持っていたことを知ってうれしかった。彼は、われわれの手紙は、共同の抗議であって、ペトログラード・ソヴェトによって可決された、多数の人命を奪う決議についてのみに限るべきだ、と示唆した。あの集会にわれわれとともにいた二人の同志が、われわれと見解をともにし、当局への共同アッピールにわれわれと一緒に署名することを申し出た。私は、われわれのことづてが、水兵たちに宣せられた措置へ、何らかの抑制的な影響、あるいは、何らかの制約を及ぼすという、いかなる希望も持っていなかった。しかし私は、私が共産党による革命への最も邪悪な裏切りに対して黙ったままでいたのではないことを証明するであろう、未来のための証言となるように、私の態度を記録させようと決心していた。

午前二時に、サーシャはジノヴィエフに電話して、クロンシュタットのことで重要な事柄を伝えたい、といった。おそらくジノヴィエフは、それをクロンシュタットに対する陰謀を助けうる何かだと考えたのであろう。そうでなければ、彼は、サーシャが彼に電話をした十分

後、夜のこの時間に、ラヴィチ夫人をわれわれに急いで差し向けるため、仕事を中断することはなかったであろう。彼女は絶対に安心できる、彼女にことづてを預けるように、とジノヴィエフの書付はのべていた。われわれは、次の声明を彼女に渡した。

ペトログラード労働組合および防衛ソヴェトに。
ジノヴィエフ議長殿。

沈黙を守ることは不可能になった。それは犯罪的ですらある！　最近の出来事は、われわれに、われわれアナキストに、現在の状況を前にしたわれわれの立場を語り明らかにすることを余儀なくさせる。

労働者たちと水兵たちの間に現われた動揺と不満の気持は、われわれの誠実な注意を要求する諸原因の結果である。寒さと飢えが不満を生んだ。そして、討論と批判の可能性がないことが、労働者たちと水兵たちに、彼らの苦情を公然と申したてることを強いたのである。

白衛軍の諸部隊は、彼ら自身の階級のために、そうした不満を利用することを望んでいるし、そうしうる。労働者たちと水兵たちのかげに隠れて、彼らは、憲法制定会議、自由貿易を要求する、スローガンを打ちだし、似たような要求を提起している。

われわれ、アナキストは、すでに久しい以前から、それらのスローガンの誤ちを告発した。そして、われわれは全世界に向かって、われわれは、社会革命のあらゆる友と協力し、ボリシェヴィキとも手を携えて、武器を手にして、あらゆる反革命の企てと闘うであろう、と宣言する。

ソヴェト政府と労働者たち、水兵たちとの間の紛争については、われわれは、武力によってではなく、同志愛的な手段によって、革命的な友愛的な一致によって、解決されねばならない、と考える。

ソヴェト政府によってとられた、血を流すという決定は、現在の状況の中で、労働者たちを静かにさせるものではなかろう。反対に、その決定は、事態を重大化させるだけで、対ソ協商（対ソ干渉戦争を行なった第一次世界大戦の連合国）と国内における反革命の動きを活発化させることとなろう。

さらに重大な、労働者と農民の政府による労働者と水兵に対する武力の使用は、国際革命運動へ反動的な結果をもたらし、社会主義革命に最大の打撃を与えることとなろう。

ボリシェヴィキの同志たちよ、遅くなりすぎないうちに反省せよ。軽挙妄動をするな。諸君は、決定的な、きわめて重大な一歩を踏みだしつつある。

したがってわれわれは、諸君に次の提案をする。二人のアナキストを含む、五人からなる委員会の選出を許可せよ。この委員会は、平和的な手段で紛争を解決するために、クロンシュタットにゆくこととなろう。現在の状況の中では、これが最も根本的な方法である。それは、革命的にも国際的にも重要なことである。

ペトログラード、一九二一年三月五日。
アレクサンドル・ベルクマン、エマ・ゴールドマン（そして他に二人の署名）。



われわれのアッピールが、耳を貸そうともしない人々の下にしかゆかなかった証拠は、同じ日のうちに、トロツキーが到着してクロンシュタットへの最後通牒を発したことによって与えられた。労働者と農民の政府の命令により、彼はクロンシュタットの水兵たちと兵士たちに、あえて《社会主義の祖国に反抗する》ものすべてを《雉子のように撃つ》こととなろう、と宣言した。反乱中の軍艦と乗組員は、武力によって帰順させるというおどしの下に、ソヴェト政府の指令に即時に服するよう命令された。無条件で降伏したもののみが、ソヴェト政府の慈悲をあてにしうるであろう。

この最後の警告は、革命軍事ソヴェト議長としてのトロツキーと、赤軍司令長官カーメネフによって、署名されていた。統治者たちの神権をあえて疑うものは、またもや死刑に処せられるのである。

トロツキーは自分の発言を実行した。クロンシュタットの人々のおかげで権力を握った彼は、今や《ロシア革命の誇りと栄光》に十分に彼の負債を支払う立場にあった。ツァー体制の最良の軍事的専門家たちと戦略家たちが、今では彼に尽くしていた。彼らの中には、トロツキーがクロンシュタットに対する攻撃の総司令官に任命した、名高いトゥハチェフスキー[8]がいた。そこにはさらに、三年来殺す技術を訓練してきたチェカー兵士の群れ、与えられた命令に盲目的に服従するので特に選ばれた、《クルサンティ》と共産主義者たち、また他の戦線からの最も安心できる部隊がいた。

有罪宣告を受けた町に向かってそうして集結された力によって、《反乱》は容易に屈服させられる、と予想されていた。特に、ペトログラードの守備隊の水兵たちと兵士たちが武装解除され、包囲された同志たちへの連帯を表明したものすべてが危険地帯から一掃された以後は、そうであった。インターナショナル・ホテルの私の窓から、私は、チェカー部隊の強力な分遣隊によって囲まれ、小さなグループごとに連れてゆかれる彼らを見た。彼らの歩みはまったく活気を失っていた。彼らの腕は体にそって垂れ下り、彼らの頭は悲しげに傾いていた。

当局は、もはやペトログラードのスト参加者たちを恐れなかった。彼らは、飢えによって弱められ気勢をそがれ、彼らの精力は枯渇していた。彼らは、自分たちとクロンシュタットの兄弟たちについて流布されている嘘によって、意気沮喪し、彼らの精神は、ボリシェヴィキの宣伝のために注入された疑惑の毒によって、くじかれていた。彼らはもはや闘いの希望も、自分たちのことを考

えずに彼らの弁護をした、今では自分たちの生命を犠牲にしようとしている、クロンシュタットの同志たちを助けうるといういかなる希望も、持たなかった。

クロンシュタットは、ペトログラードから放棄され、ロシアのそのほかの地から切り離された。それは、孤立していて、ほとんど抵抗しえなかった。「それは、銃の最初の一撃で崩壊するであろう」と、ソヴェトの新聞は述べていた。

それは間違っていた。クロンシュタットは、ソヴェト政府への、《反乱》も抵抗も、いささかも考えてはいなかった。最後の瞬間まで、血を流さないことを決意していた。それは、絶えず、理解ある友好的な解決を訴えていた。しかし、軍事的挑発に対して自衛することを強いられて、獅子として闘った。疲れ果てた十日十夜の間、包囲された町の水兵たちと兵士たちは、三方からくる、絶え間ない砲火に対して、非戦闘員の住民の上に飛行機から落とされる爆弾に対して、頑強に抵抗した。彼らは、モスクワから来た特殊部隊をもって要塞を攻略しようとする、ボリシェヴィキたちの再三にわたる企てを、英雄的に撃退した。トロツキーとトゥハチェフスキーは、すべての点でクロンシュタットの人々にまさっていた。共産主義国家のすべての工場設備が彼らを支援していたし、中央集権化された新聞は、いわゆる《叛逆者と反革命者》に対する邪説をいいふらしつづけていた。彼らは、無制限の援兵と、凍結したフィンランド湾の雪とまぎれるよう、白い布で身を隠した兵卒たちを持っていた。彼らはそうして、それを予期していなかったクロンシュタットの人々に対し、不意をついて夜襲をかけたのである。クロンシュタットの人々は、彼らの動機の正しさと、独裁からロシアを救いうる唯一のものとして彼らが説いてきた自由ソヴェトへの、変わらぬ信頼と、抑制しえない勇気以外の、何一つをも持たなかった。共産主義者という敵の襲来を阻むために、彼らには砕氷艦すら欠けていた。彼らは、飢え、寒さ、眠らぬ警備の夜によって、へとへとになっていた。しかしながら、彼らは頑強に抵抗し、決定的な力関係の中で、絶望的に闘った。

このぞっとするようなサスペンスの中で、友好的な声は一つも聞かれなかった。重砲の轟音と大砲のうなりに満たされた日々と夜々の間、抗議をする、あるいはこの血の海の停止を訴えるものは誰一人としてなかった。ゴーリキー……、マクシム・ゴーリキー……、彼はどこにいたのか。人々は、彼の声に耳を傾けたろうに。

「彼に会いにいこう！」私は、《インテリゲンチャ》に属する何人かの人々に訴えた。彼らは、ゴーリキーは、個人的な重大な場合にも、彼自身と同業のメンバーにかかわる重大な場合にも、有罪を宣告された人々が無実であることを知っている時にすら、決して抗議をしなかった、といった。彼は、今も抗議しないであろう。それは、希望の持てないことであった。

《インテリゲンチャ》、一度は革命のスポークスマンで



あった、男性たちや女性たち、思想の巨匠たち、作家たちと詩人たちもまた、われわれ自身同様に無力であり、個人的なそれぞれの努力の無益さのためになす術を失っていた。彼らの同志たちや友人たちの大半は、すでに投獄されているか亡命していたし、その何人かは処刑されていた。彼らは、すべての人間的な価値の消滅によって、意気沮喪していた。

私は、われわれが知っている共産主義者たちに会いにいった。私は彼らに、何かするように嘆願した。何人かは、彼らの党がクロンシュタットに対して犯しつつある、途方もない犯罪を理解していた。彼らは、反革命という非難は完全にでっちあげだ、と認めた。指導者と称するコズロフスキーは無能な人であって、水兵たちの何らかの抗議とともに、何であろうとなすべきものを持つには、あまりに自分自身の運命に心を奪われていた。水兵たちは、優れた美質を持っていた。彼らの唯一の気がかりは、ロシアの安泰であった。ツァーの将軍たちの肩を持つどころか、彼らは、革命的社会主義者の指導者、チェールノフが差し伸べた援助すら拒絶した。彼らは、外部からの援助を望まなかった。彼らは、クロンシュタット・ソヴェトの来たるべき選挙において、彼ら自身の代表を選ぶ自分たちのための権利と、ペトログラードのスト参加者たちのために正義を、要求したのである。

共産主義者の友人たちと、いく晩かわれわれは夜を徹した。……語り合い……語り合い……、しかし、彼らの誰もが、公然たる抗議のための叫びをあげなかった。それが彼らにもたらす結果をわれわれが理解していない、と彼らはいった。彼らは、党から除名されるであろう、彼らとその家族たちは、仕事と食糧割当を奪われるであろう、そして彼らは、文字通り、飢えて死ぬことを余儀なくされるであろう。あるいは、彼らは単純に姿を消すであろう。誰も、彼らがどうなったのか、決して知ることはないであろう。しかしながら彼らは、彼らの意志を無力なものとしているのは、恐怖ではない、とわれわれに断言した。それは、抗議ないし訴えの、完全な無益さであった。何ものも、絶対に何ものも、共産主義国家機構をとどめることはできなかった。彼らは、それによって打ちひしがれていた。彼らにはもはや、抗議する力すらなかった。

私は、われわれ、サーシャと私もまた、彼らのようにすべての気力を失って忍従する、そんな状態になるかもしれないという、恐ろしい懸念につきまとわれた。すべては、それよりは好ましかった。牢獄、亡命、死すらも！　あるいは逃亡も！　この怖るべき詐欺、革命の見せかけから逃げること。

ロシアを離れようとする考えは、それまで決して私をかすめたことはなかった。私は、この考えだけで、混乱し衝撃を受けた。苦難に立つロシアを放棄すること！　しかし私は、私はあの機構の一部に加わることよりは、意のままに操られる死んだようなものになるよりは、そ

うするであろう、と感じた。

クロンシュタットの砲撃は、絶え間なく十日十夜の間つづき、三月十七日の朝、突然、止まった。ペトログラードを覆った沈黙は、前夜の絶えることのない砲撃よりも恐ろしかった。待つことの苦しみがわれわれ皆をとらえた。何が起きたのか、なぜ砲撃は不意に止んだのかを知ることは不可能であった。午後になって、緊張は無言のおののきに席を譲った。クロンシュタットは、屈服したのである。約一万の人々が虐殺され、町は血の中に埋まった。重砲に氷を砕かれたネヴァ河は、多数の人々、クルサンティと若い共産主義者たちの墓となった。英雄的な水兵たちと兵士たちは、最後の息を引きとるまで彼らの陣地を守った。闘いつつ死ぬ機会を持たなかった人人は、敵の手中に落ち、処刑されるか、ロシア北部の氷結する地方でのゆっくりした拷問へと送られた。

われわれは、肝を潰した。サーシャは、ボリシェヴィキへの信頼の最後の望みを失って、絶望して街をさまよっていた。私の五体は鉛のようで、神経という神経が途方もなく疲れていた。坐って、動かずに、私は夜を見つめていた……。

翌日、三月十八日、苦しみの十七日間の睡眠不足のあとで、まだ半ば眠ったまま、私は、たくさんの足音で目を覚まされた。共産主義者たちが、歩調をととのえて行進してゆき、音楽が軍隊マーチを奏で、インターナショナルが歌われていた。かつて私の耳を喜ばせたその調べは、今では、人類の熱烈な希望への、葬送歌として響いた。

三月十八日、三万のコミューン参加者の屠殺人、ティエールとガリフェによって二カ月のちに粉砕された、一八七一年のパリ・コミューンの記念日！　一九二一年三月十八日、クロンシュタットでの模倣者たち。

クロンシュタットの《清算》の真の意味は、恐怖の三日のち、レーニン自身によって明らかにされた。クロンシュタット攻略戦の間に、モスクワで開かれていた第十回共産党大会において、レーニンは、霊妙な彼の共産主義讃美歌を、思いがけなくも、新経済政策という、まったく同じだけ霊妙な詩篇に変えた。自由貿易、資本主義者たちへの譲歩、農村と工場での仕事の自由な周旋、三年以上もの間、反革命を意味するものとして非難され、投獄か死刑によってすらも罰せられたすべての事柄が、今では、レーニンによって、栄光ある独裁の旗に書き加えられた。

いつものように厚かましくも、彼は、党の内外の誠実な思想に富む人々が十七日の間知っていたこと、つまり「クロンシュタットの人々は反革命者であることを願わなかったこと、しかし彼らはまたわれわれのようであることも願わなかった！　こと」を、認めたのである。素朴な水兵たちは、レーニンとその党が忠実でありつづけるとおごそかに約束した、《すべての権力をソヴェトへ！》という標語を、真に受けていたのである。それこそが、クロンシュタットの人々の許しがたい誤ちであった！　そのために、彼らは死なねばならなかった。彼らは、完全に以前のものを廃止した、レーニンのスローガンの新しい収穫のために土地の肥しとなるよう、殉教者とならねばならなかった。傑作は、新経済政策ネップ[10]であった。



クロンシュタットについてのレーニンの公的な告白は、それにもかかわらず、打ち破られた町の、水兵たち、兵士たち、労働者たちへの追撃を阻まなかった。彼らの何百人もが逮捕され、チェカーは《標的射撃》に没頭した。

奇妙なことに、クロンシュタットの《反乱》の際に、アナキストたちが問題とされなかったことは確認される。しかし、第十回大会でレーニンは、アナキスト分子をも含む《プチ・ブルジョア》に対する、容赦のない闘いを開始しなければならない、と宣告した。労働者反対派[11]のアナルコ・サンジカリスト的傾向は、この傾向が共産党自身の中に発展していることを証明した、と彼は明言した。レーニンによって発せられた、アナキストに対する宣戦布告は、即時に反響を呼び起こした。ペトログラードの諸グループが手入れを受け、かなりの数のそのメンバーが逮捕された。さらに、チェカーは、われわれの戦列のアナルコ・サンジカリスト部門に属する『労働の声』を発行していた、印刷所と事務所を閉鎖した。

われわれは、それらが起きる前に、モスクワにゆくために切符を買っていた。大量逮捕を知った時、われわれは、われわれが追求されるであろう機会のために、もう少し長くとどまっていることに決めた。しかしながら、われわれは煩わされることがなかった。おそらく、《無頼漢たち》のみがソヴェトの牢獄にいることを世界に示すために、いく人かの知名のアナキストが自由でいることが必要だったからである。

モスクワで、われわれは、五、六人を除いて、全アナキストたちが逮捕されたことを知った。しかしながら、われわれの同志たちに対していかなる告発も行なわれなかった。彼らは、聴取もされず、裁かれもしなかった。それなのに、彼らのうちの何人かは、すでにサマラの収容所に送られていた。まだブーチルキーかタガンカの牢獄にいた人々は、もっとひどい迫害か暴行すらも受けていた。そうして、われわれの少年の一人、若いカシーリンは、牢獄の看守のいる前で、チェカーの一兵士になぐられた。革命戦線で闘った、多くの共産主義者たちに知られ尊敬されていた、マクシーモフ[12]やそのほかのアナキストたちは、拘禁の恐るべき条件に抗議するため、ハンガー・ストライキに入ることを余儀なくされた。

われわれがモスクワに帰った時、われわれがするように頼まれた最初のことは、われわれの同志たちを根絶するために共謀された戦術を非難する、ソヴェト政府あての声明に署名することであった。

われわれは、もちろんそれをした。サーシャも、今で

は私同様に、ロシア国内でまだ自由な、一握りの政治家たちの抗議は、完全に無効で無益であることを確信していた。一方、われわれが大衆と接触を持つことが可能であったとしても、いかなる効果的な行動をも、ロシア大衆に期待することはできなかった。戦争の、内乱の、苦痛の何年もが、彼らの生命力を枯らしていたし、テロルが彼らを沈黙させ屈服させていた。

われわれの希望は、ヨーロッパとアメリカ合衆国だ、とサーシャはいった。外国の労働者たちに、〝十月〟への恥ずべき裏切りを知らせる時が来た。各国の、プロレタリアートの目覚めた意識と、そのほかのリベラルな急進的な分子が、冷酷なあの迫害に対する、強力な抗議を組織することとなろう。それのみが、独裁の手を阻みうるであろう。それ以外には何一つない。

クロンシュタットの殉教は、すでにそんな影響を私の友に及ぼしていた。あの殉教は、ボリシェヴィキの神話の最後の名残りを打ち砕いた。サーシャのみならず、以前は、革命期における不可避的なものとして、共産主義者たちの方法を擁護していた他の同志たちもまた、十月と独裁との間に深淵を発見することを強いられたのであった。

## クロンシュタットで開かれたバルチック艦隊第一、第二艦隊総会の決議

(一九二一年三月一日)

状況を検討するため乗組員総会によってペトログラードに派遣された代表たちの報告を聞いたのちに、総会は、以下のことが必要であると決定する。

現在のソヴェトは労働者と農民の意志を表明していないので、

1　秘密投票によってソヴェトの再選挙を即時に行なうこと。労働者と農民の間での選挙運動は、言論と行動の完全な自由の中で展開されなくてはならない。

2　すべての労働者と農民に対して、アナキストに対して、左翼の社会主義諸党派に対して、言論、出版の自由を確立すること。[13]

3　労働組合と農民組織に、集会の自由を認めること。

4　ペトログラード、クロンシュタット、およびペトログラード地方の、労働者、赤軍兵士、水兵の集会を、諸政党にかかわりなく、遅くとも一九二一年三月十日までに招集すること。



5　社会主義者である政治囚すべて、ならびに、労働者と農民の運動をして投獄されている、労働者、農民、赤軍兵士、水兵のすべてを釈放すること。

6　牢獄や収容所にいる人々の訴訟事実を審査するために、委員会を選出すること。

7　《政治委員部》を廃止すること。なぜなら、いかなる政党も、その思想を宣伝するために特権を持つことも、そのために財政援助を国から受けることも、許されないからである。そのかわりに、各地区で選出された、政府によって財政を賄われる、教育と文化の委員会を設置すべきである。

8　すべての通行止め[14]を即時廃止すること。

9　健康にとって危険な職業に従事している人々を除いて、すべての労働者への食糧割当量を一定にすること。

10　軍のあらゆる部隊での、共産主義者選抜分遣隊、ならびに製造所と工場内での、共産主義者衛兵隊を廃止すること。

11　農民に対して、彼らが彼ら自身で仕事を履行する、つまり賃労働に頼らないという条件で、彼らの土地についての行動の完全な自由と、家畜を持つ権利とを、与えること。

12　監査巡回委員会を任命すること。

13　賃労働者を使用しない、家内工業の自由な営業を許可すること。

14　われわれは、軍のすべての部隊と、軍事《クルサンティ》の同志たちに、われわれの決議に加わることを要求する。

決議は、艦隊の乗組員総会によって満場一致で可決された。二名が棄権した。

署名。ペトリチェンコ、総会議長。ペルベルキン、書記。